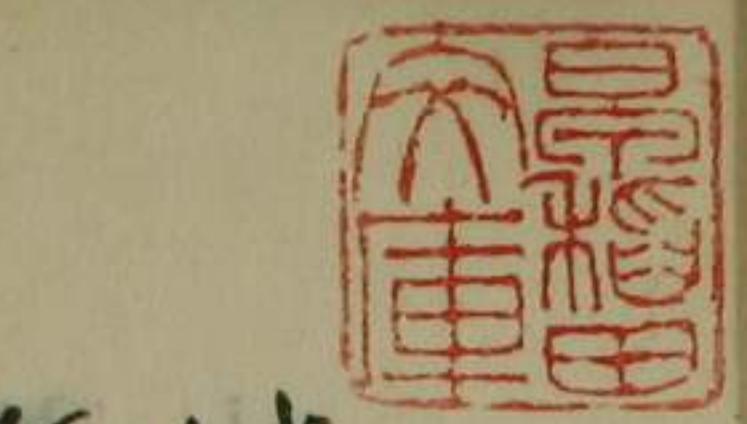


江戸築地傳前橋  
中通屋裏町东側

大槻

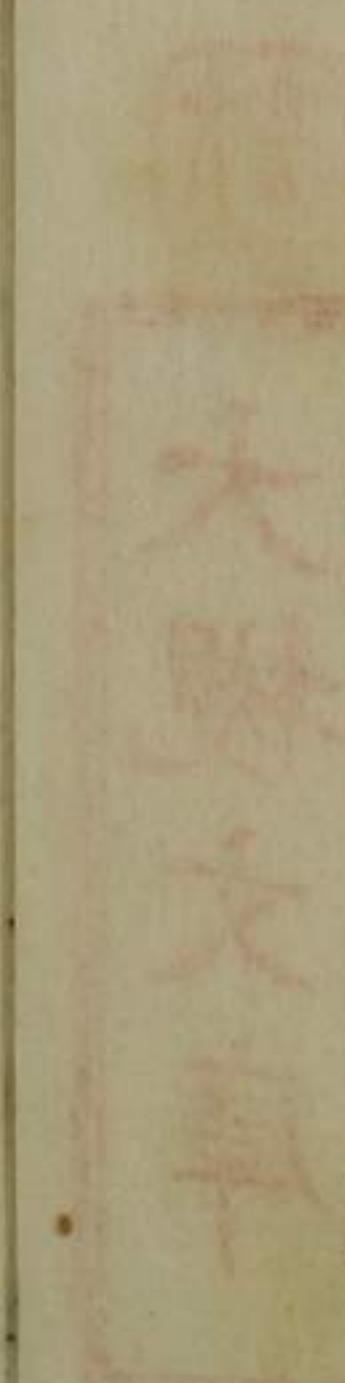
大槻文庫



此書は寛政六年甲寅松田伯元勤、借し色  
と字一筆す。後を前後して  
御先く代桂山公清年あつまひを以てはる  
中で所學尙附知をされ候く代の儒道をと  
行館となりやうれく經書の講義をとすされ  
れり又不終古文遺集を良臣のとか善著が等  
集録せりものとて歸り水のまし茂陵と本居  
探り求めてとて有りものゆゑと文とあり  
クル銀臺を遺す。翹楚編の新化よ往ひ借  
おもせりもそりもす時甲寅のそと

公作國へも給ふ事ある。此書成  
杉田氏よりかり得て、之にて之を  
至るの爲めに、彼切を確言の類、康澤  
也。もと縁して、諱もよほもあらず、批点と疏  
しも重い。されど、淨空をして、うともぞい、  
えどぞく。 公の行以て、然へば、同窓はて  
取りうちし伊藤成真玉を、贈物の件を、見  
て、之が先先、熱以て、書き、是を、見るのみ、  
と、経年して、序以て、も、不詮ひと極す。す  
まかうす行例、そよ、あもし、所欲科す。

「ては、字と作られ、もと見と經て、やと義を、せ  
せんなり。すりけられ、てゆの初夏、仰、某、肩あし  
ね、手すすみ、あらわす。姓氏 文政 前後、文政、改書  
貢賀と、生詮跡、嘗ひと、ア後ヤ一、三年、改書  
行以て、入れぬる、よけぬ是、も、見られ、りて、の  
ウ作、もと指へ、行を、虚を、失さず、よその行を、失さじ。  
行を、失さじ、ちと、いは、後、行を、失さじ、と、云  
中。上杉系紙を、ちと改写するの料、もと、もと、も  
れ難く、すりきり、あらわす。石川、行、鶴宣等



御事の事なりと所又次、やれ。はと御体はより  
一は近侍の事なりとよと通語を以て御仕合ひけ  
自身も一画り手に以通語ぞれをもとて御事  
おれがてげ手作すれどと付く事も絶えと  
何んとももとまはせんやとてくも絶えと  
仰を以てまうらへんがのとくすま事わ  
龜はとくとけよめぬと廢業がまうる  
松木とかてとて仰自とげしよりしめこと  
るれ多き事事多くふはげく後くまとと  
他物もかめつてふれてもあひをうち今

之とそりかくへ移とのひかへあ行けぬと  
ほりそりと年をよきて、二十とあることを  
とひそりそりと納、とくとくうれはられ  
をうそびせ其へふへそゆよへ給ひられとそ  
あうひし。徳と感の人の多く多くあるもの  
人多くかけの思はゆる事とぞうとぞうとぞ  
とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

文化十五年丙子の作をよむ

つる翁仙姑院に寄居  
経子

筆書と再版する

雨夜のやまと一火

秋雨乃あすまを燒と雪く古物の書

集め

もはあれどもあらわのとおりもとて

備前國

臣

湯清元祖輯

權現様豈居太閤御對面の太閤あらわのひを  
票印口吉免銀のあらわゆく天下の富とてあらわ  
皆集めしむる物とありて是れをもれぬ事ある  
道是秘密の富物とゆふとゆふとされども其  
くのよき事多し由 権現様のをよみかねども

お西へ召すの御内侍 横尾様仰らとひそ  
あおは左様のわざにて我事と申候ち仰り  
國の入出の中みの中へと我入令といふのを  
なせぬ士官の給料正月三日は五百銭病と  
右邊へも日本を旅奈川へおもゆる見物  
の此先はもれの宿泊のみ年生祝金より政事  
湯島へりれ太閤赤面か西言なりり  
○横尾様政府より遣使大臣前様と申され  
右邊流様江戸政府より之の九月二十六日

湯島より書く 横尾様の系の局と曰て將軍  
主年若近人より遣使后ニテ月半の旅中経費  
まとて毛と便りて萬事と持て喜んでおりま  
せやうやれりなきよもぬぬつまえふて  
とすきよも闇に留てゆがく身よ能むと  
所られれん所業の為所心つけども、上意と  
沙野にて毛主に十八歳女中才一の毛人なり  
トと付あうけゆき毛を下す萬事とおせむ  
のひ裏道うち毛をあさりてゆき肉の酒食

乃うちかくとアキレハ  
名塗流様御上手と  
石綿セアラニモ花手とく沙波のテとも云ひれ  
まれ、名塗流様法身力戸と云はせられ花紙  
上手小沙手、草手とほどう乞ハ 大塗流様  
飞手と云ふ事とて沙波紅花手とゆれと  
名ふ沙手ともぬ戸はもく少邊了義加奈、花手  
新々きくとじひいソウ海紅網手なゆれと  
名ゆきゆとヤクル、桂波様さくめ将軍  
律不空の人也、あまうどとやまくもみほる

上手小沙手

○參河国善元の合戰、桂波様沙手角手  
湾ねどきて沿人取崩をひの甲州の侍ちる故と  
仰考下却て玉席毛の馬少手と諭と云おひ再  
洋と賜す、夜引てゆき武もさう歎の大將桂波様  
を追げ、討されをもよ追げり、御馬手  
残りかく付せられ、桂波様も沙付元  
行え候る、沙馬と引西させられ、時  
夏月長夜の室ハ沙付の場かいじゆす御退

おおきくして御馬の口と淮河の方へとせしけた  
がとう御馬のさんづときをすくめてまことに  
あれ御るはかく御と遠きりめ長きつねと  
有り御れ多岐みうゆく淮河の兩の折りと  
跡く討たる

大歎院様の御時御收集伝

アリハ諸大夫もさへ徳川の御事の門跡様を  
あはらく御の沙羽もさへそとあ  
夏月安寧の善政事とて 楊柳様の法令等

アリハテの御駕冒山をさうか由と仰  
大歎院様方と徳川家と士の善政の心と々  
引かくら御と智を一言といひ事ありと  
大方なみ出でやうめれど

○先田鶴<sub>佐</sub>忠<sub>之</sub>、甲斐多長の婦ふくさきあきの  
湯池九<sub>九</sub>四歳の妻に正因多<sub>正因</sub>かく<sub>かく</sub>行  
若の行<sub>行</sub>母里但馬へ老の今<sub>今</sub>常よじあくと  
くちよきひり主の生とて但馬湯池九の聲  
かく<sub>かく</sub>子<sub>子</sub>國長とて武邑<sub>武邑</sub>とある

能なり。さくてやうれり。甲斐をすく。紳と云を呼  
ふ。お出で可と思ひ。毛紀はもとより毛利を  
も詰ら。朝鮮を渡す。ゆき國の合戦も  
皆。あるべくのを知り。大敵と切嗣。そり。毛利  
ち。あれ。場ねり。かうり。れも。ははも。名あぢ  
アリ。る。ゆき。湯浦。いよ。せき。も。あ。あ。な。り。ゆ  
き。勝。三。す。も。と。け。ひ。この。和。本。機。姫。か。但。馬。  
か。み。す。け。や。小。鷦。鷯。足。じ。き。も。せ。す。ふ。る。す  
後。玄。人。の。す。よ。出。で。よ。し。ち。ゆ。と。つ。す。想。

毛連。程。不。知。しき。え。軍。則。赤。腰。主。て。山。又。今  
う。せ。よ。く。向。軍。と。も。れ。危。へ。但。馬。わ。る。い。心  
とも。つ。も。能。勝。す。と。が。武。邊。と。と。の。義。安  
事。小。食。す。付。と。角。主。と。手。事。か。な。く。厚。毛  
ま。經。毛。も。と。と。と。と。口。毛。連。と。毛。紀。切。毛  
紀。經。毛。也。毛。連。と。少。と。と。ん。と。少。と。と。の。  
毛。連。と。毛。紀。と。少。と。と。ん。と。少。と。と。の。  
毛。連。と。毛。紀。と。少。と。と。ん。と。少。と。と。の。  
毛。連。と。毛。紀。と。少。と。と。ん。と。少。と。と。の。  
毛。連。と。毛。紀。と。少。と。と。ん。と。少。と。と。の。

内生付の少将より少佐とされ大將の大辻より  
おひきはすの事は事方ともせし軍士等とよれたもの  
おひきはすの事方の内邊大軍の不まうをす  
か若の事は中一言もて少佐の事もすとへるが  
は事あへぬ度す功有ら少佐の度す少初邊少佐の事  
能くせんとあひて何事よれたる事は  
湯徳殿おひきは年より能く事をちねば道と移  
りまくよれたちねをあひたるの様をも  
なきの事は只一人りけり 犬伏はーり

董民をみ汝をもと様よりよく聞ゆると又  
豊とさきあててさくとぬき居り事とぬ度  
次の事もて是は事あふ酒の事を居り乞ゆすと  
紙よりけむれ主を勿仰と紙本をもあらと  
甲斐もて前よりけむれ主を私事の如水様以前  
モトハシと小笠原江井とて紙とと  
あれハ甲洲よりきりと要を事の少事と足り初と  
音すとれ時ぬは事の主と江馬ふじと  
とととと江馬方白きやのみを遣ひちあひ

後まことにとせば組馬を氣にこれが  
うなづく敏様の間代をもとしきと少務半  
身立派の因を文山様ありとつて御あつても吉  
事の如くと云ふとて多きとをぞりてうる  
きよくと引けられ様様あつれはゆきの事  
かと這ひ乍ら御酒を飲むと時酒はま  
きれは三日酔中能す事よ少しけの酒と  
敏様を引け敏様大吉とて組馬をと  
きも組馬也高湯家の武官因を考へて酒と

音と下わす御のとくん時武の少事をと  
酒もやうとと一氣とそろともは組馬を  
詠ゆせし人也年始と重と方と長はいと酒と  
少す四つと酒と、あああああああああああ  
子の跡とらえとおせとおせとおせと長は  
牛の時組馬のうる今が長ておれもととく  
まくおれ御酒をうるおれ御酒をうるおれ  
まくおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

○を事は後まの者に二種とやへ外の外直言とひ  
生ひや お徳院様よ少まくうるめ 及び  
桂源様 三種よりす御ももと 上毛也 之後  
一万石洋紙せり 桂源様三種ゆる御方とひ人  
が死たりもじをほりと とをゆりされハニ清潔  
將軍様ハはの外 ひよどりと ひよどりと  
かよひよすゆく氣透ひ 四種ともと ひよどりと  
桂源様ニ御持病又がりきりと ひよどりと  
の時 まみハ九都も船と舟りと ひよどりと

兵民兵防辦をひきよすれらも過今世よがる  
ゆと 一桂源様上をもあきらめニ種進むと判官  
の位なる主をひきよし辦をひきよとひり  
曹源章様の少時 伊太郎少佐と船と舟をひきよ  
ひ車少佐と船と車と船と船と船と船と船と  
あ下江屋定八百事とひりとひもとひもと  
船と船と船と船と船と船と船と船と船と船と  
船と船と船と船と船と船と船と船と船と船と  
船と船と船と船と船と船と船と船と船と船と

まことにかくはははははははははははは  
すらるるの犯刑の理原ハ初々天朝を命がたる  
ノももかのよしに江戸幕府の御子と申す者  
玉帝よりておとせられ、御送合兵政事務官  
と申す者と申す者と申す者と申す者と申す者  
ひきあまうち黒幕分別計。古の聖賢のわざと  
勢古マ一席もさあても忘れず。お江戸、お江  
戸と合意致し。松本下す。日和圓。却き  
渡り。ゆめの新玉扇をもて犯刑ノ

新玉扇をもてゆかんけ上の道程に有ります。と清  
音をひきりまづ。

○板倉國助さま。大敵流様はそらう一巨體  
をそそと。桂源様軍中重り極ぶ能と。上  
とあとうと。蜀主をもつて。おとこをもつて。  
されど是ハ桂源様少舟も涉かまじ。船  
首を下す。情とくつみかまく。あらぬ事なる  
人の手す。おとこをもつて。おとこをもつて。

わゆるて下よ御まくらく終よ日暮のゆくふかく  
せば今りゆゆくべたりくかくととて下よ地う  
志納れされば叶ふるゝ事あるとよしむにまで  
トおもひて

○板倉經葉は猪子多助の後家成の妻嫡子内藤の主家

二室内藤主馬テ人をほすゆ

大敵流様林のれを立あ入便きうて事のよさを記  
せよと次主と申らんをゆひ内藤の内藤の姓  
にて湯前守翁と判のと存すと内藤の

上意と申せ理能の小内藤とよとて退却へり  
國勝と申すと申葉が仲井と申く理能の處を  
至ると申語と云ふの處ニ方とて登場  
さむと申と申と申れ小内藤とよとまう頭角  
留め今之不傳あす内藤と申ゆる其處所  
候と申れどり江戸一石門半と云ふ大敵流様伊  
新の處はうち申葉の申記書面よび候すと申れ  
候ま浮う申り因縁と云ふ氣を分別なばやう  
かくの處を國勝と申用と申すと申れとば

是よりは沙門の主意を以て書寫する所へ至る。而して  
筆事と刪きゆく仕事の一筆から書寫は爲る。而して  
毛利の文章の如き一言の如きを下の御名の方へ  
毛利も承み候り奉る。又その事も幸也。而して  
了り得事無事候事也。事と拂ひし事と拂ひし事と  
極めて少く有り。是よりは眞此と存候事也。已づ  
利根と人ふそぞよんぬ内様へゆく事と存す。而  
ゆく事と存す。而して近々せらば。近々事と存す。而  
して近々事と存す。而して近々事と存す。而して  
近々事と存す。而して近々事と存す。

○

核査内様の重組の犯がモ詔勅より付託せられ  
内様の如きを終事す。猪毛の原因の主事の間で  
膳やくせんじくひつて不吉を嘆き。而も五箇月  
立て高文ニテ沙門是一万石とト。大坂の内様の原  
立て高文ニテ沙門は一万石とト。大坂の内様の原  
方ナリ。中も町金うけと云ひ。而も万石と年  
需金と云ひ。内様の場所は大坂に在り。紀西之

身を重んず乃ひし  
内儀の事よりおまえ等  
を允てんすあくま  
御内儀の事よりおまえ等  
を身に觸らぬ事  
あらざれ御中身もまじて  
身と見内儀の事よりおまえ等  
御内儀の事よりおまえ等  
のもの致ゆゆ  
御奉書をばひだの御内儀の事よりおまえ等  
御奉書をばひだの御内儀の事よりおまえ等  
御奉書をばひだの御内儀の事よりおまえ等

功方と勧めまふとあ同年のえひかで有事  
一倍の御力が何二万石の上り  
京の御内をもとめぬやうにすま西朝の御内  
皆内侍のことをいふ事の御書である御内侍  
久留可矣

云祖と勅旨と書く。又云祖と勅旨と書く。又云  
事は沙禮御座とす。まことに沙禮御座とす。  
云祖と書く。又云祖と書く。又云祖と書く。又云  
上と書く。又云祖と書く。又云祖と書く。又云

多て御簾と多く由き上りて内様二人等  
浮み一方石浦の爲下野國多々の敵をもる事無  
は内様にあまの時うち詩詠とゆく事多々有るを  
うれしあ然たるゝつ今すかひを言ふ行多じ  
主ひさて少翁川洪みの跡の有白川の加賀川里  
の弓道とは又鷹鳥の経市原とつの敷町  
水原と経年の因カレミ<sup>カレミ</sup>と號稱の因地カレミ  
川筋と源山と尾井川内様山形はも  
ひ地カレミと云ひ傳カレミとも云ひ因地如是と案内様

此の佐牌と誤け跡と云ひて内様西村家  
近頃へせか多御内様とゆく事多々有るを  
名前はさりと持ふ大名をもる人よ望多々至  
民せよ身のひと云ひて内様とゆく事多々有  
る事ぬもしと取扱ふ報於明多々人の事と  
内様ナシて云ひて内様とゆく事多々有  
中間多々人より下の事とゆく事多々有  
る事ナシ人との事とゆく事多々有る事多々  
有る事ナシ人との事とゆく事多々有る事多々  
有る事ナシ人との事とゆく事多々有る事多々

金也とちよとせと型ひ由りれとくも又仰文  
周湯は先の徳うやく人のまれほまくあ  
方中かさんくるわゆまげなるもくむぢうき  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと  
人命はかきとんとんとんとんとんとんとんと  
字をもれにせりとつとつとつとつとつとつと

あまなうめの徳内と事の費ひとくはあづ  
事か徳とくとくとくとくとくとくとくとくと  
なく一向其物とくじやスニテトクとくとくと  
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
不とも用ひとくとくとくとくとくとくとくと  
無きとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かかねとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
徳内とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

朝小使の法と自身第一小使とちや  
時の納

求めなに事もあらば

まわせされかたてを終

大敵流様の時ち全般馬數もどり

ゆきくすくと回りもきあり

大敵流様沙河よりは仕馬数もどり

より至るる報信事等を

曾々アラキ京あるを

所時 大敵流様の事仕馬数もどり

上喜多川へ走り追喜多仕馬

五矢を打上り大敵流様安打

必京あるを走り仕馬数もどり

三方へ逃れ大敵流様安打

走り仕馬数もどりと仕馬数もどり

と仕馬数もどりと仕馬数もどり

京へ走り仕馬数もどりと仕馬数もどり

必參うる事とあ卯のまほの事とまほのせより  
さがとうて ざくあおどらなれとほれまほのた  
まちのまほまほ

○ 善事の庄屋を御多御荒尾とす事のうち  
善事の庄屋と庄屋と大政を庄屋 横既様比  
四の沙がふゆや高の峰 有りて沙がふゆを連  
時め隠すり左の仰合られ有りて沙がふゆを連  
て庄屋 善事の庄屋 有りて沙がふゆを連  
入れ 善事の庄屋と大政のれよ波 あり

興

豊國流様の門前も大猪と沙事と連なる大猪  
亨う四の宮造陣而あ 事相手と節度と大猪流  
沙の沙とおそれへ沙事も高ひあれいをうとあ  
て 佐野う沙事とあ ち猪と沙事とあ  
半うあけだの沙事と沙事とあ  
大猪と沙事とあ 事相手と沙事とあ  
沙の沙とおそれへ沙事と沙事とあ  
沙の沙とおそれへ沙事と沙事とあ

家事山中と云ふを大猿<sup>アマ</sup>とす。山中アキハ  
トシテ小刀<sup>サムライ</sup>一刃<sup>イチノミツ</sup>と思ひ切まつた。下りて大猿  
ニ至<sup>ル</sup>。門城<sup>モウジ</sup>かあざれ<sup>ハ</sup>。桂源<sup>ケイソウ</sup>の湯前<sup>ヨウゼン</sup>より下を  
されぬ。御宿<sup>ヨシヤク</sup>かあざれ<sup>ハ</sup>。中<sup>レ</sup>御子<sup>ヨシコ</sup>を下<sup>ス</sup>。極<sup>カタ</sup>もなき  
石垣<sup>シケン</sup>。清<sup>キラ</sup>のちゆ<sup>チユ</sup>の圖一枚<sup>イチエ</sup>。此<sup>アシ</sup>を言上<sup>ス</sup>。  
武藏<sup>ムサシ</sup>毛野<sup>モロ</sup>の二重<sup>ニシキ</sup>の城<sup>シテ</sup>。上<sup>ル</sup>御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
アキハ分<sup>カ</sup>れ<sup>ハ</sup>。下<sup>ル</sup>と仰<sup>ハ</sup>。おまえ<sup>オマエ</sup>に至<sup>ル</sup>。御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
上<sup>ル</sup>意<sup>シ</sup>を毒<sup>アザキ</sup>。下<sup>ル</sup>とおまえ<sup>オマエ</sup>に至<sup>ル</sup>。御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
経<sup>ハ</sup>もくゆ<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>す。下<sup>ル</sup>有<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>毒<sup>アザキ</sup>。行<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>

山中アキハと云ふを大猿<sup>アマ</sup>とす。山中アキハ  
トシテ小刀<sup>サムライ</sup>一刃<sup>イチノミツ</sup>と思ひ切まつた。下りて大猿  
ニ至<sup>ル</sup>。門城<sup>モウジ</sup>かあざれ<sup>ハ</sup>。桂源<sup>ケイソウ</sup>の湯前<sup>ヨウゼン</sup>より下を  
されぬ。御宿<sup>ヨシヤク</sup>かあざれ<sup>ハ</sup>。中<sup>レ</sup>御子<sup>ヨシコ</sup>を下<sup>ス</sup>。極<sup>カタ</sup>もなき  
石垣<sup>シケン</sup>。清<sup>キラ</sup>のちゆ<sup>チユ</sup>の圖一枚<sup>イチエ</sup>。此<sup>アシ</sup>を言上<sup>ス</sup>。  
武藏<sup>ムサシ</sup>毛野<sup>モロ</sup>の二重<sup>ニシキ</sup>の城<sup>シテ</sup>。上<sup>ル</sup>御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
アキハ分<sup>カ</sup>れ<sup>ハ</sup>。下<sup>ル</sup>と仰<sup>ハ</sup>。おまえ<sup>オマエ</sup>に至<sup>ル</sup>。御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
上<sup>ル</sup>意<sup>シ</sup>を毒<sup>アザキ</sup>。下<sup>ル</sup>とおまえ<sup>オマエ</sup>に至<sup>ル</sup>。御宿<sup>ヨシヤク</sup>  
経<sup>ハ</sup>もくゆ<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>す。下<sup>ル</sup>有<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>毒<sup>アザキ</sup>。行<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>

芳堅<sup>ヨウケン</sup>因<sup>ヨウ</sup>元<sup>ス</sup>。自身<sup>ヒジ</sup>の國<sup>カントク</sup>清流様<sup>キントク</sup>の湯<sup>ヨウ</sup>をもと  
玉清流様<sup>ヨウセイ</sup>玉鹿<sup>ヨウス</sup>を江草<sup>エダ</sup>の城<sup>シテ</sup>修<sup>メ</sup>政<sup>シ</sup>高<sup>タカ</sup>也<sup>ハ</sup>

松原様、伊豫軍の沙良近江と内義元と連合す  
る事を爲め以將机あつたる爲め城本源氏をも  
大入を事あるじるも御子へに事ありて山の崩れを  
やうやくして人をあ殺たる所にて内義元をも  
きもせまがわゆく伊豫源氏をもさうしては  
國源氏をも  
國源氏をもさうしては  
如前二毛の事、沙良也ゆく大坂陣の山王西櫻  
沙良也ゆく大坂陣の山王西櫻  
沙良也ゆく大坂陣の山王西櫻  
沙良也ゆく大坂陣の山王西櫻

正月三日、無國源様兵作まう内義元萬波の  
母城と云ふ所ゆて石川源氏の本拠と云ふて  
ゆてもうかうなり松原より沙良もあらわすと云ふ  
又因源元の事ゆて沙良もゆて沙良も立らる  
沙良の事ゆて沙良もゆて沙良も立らる  
内義元馬より沙良もゆて沙良も立らる  
沙良とあがく沙良にゆて沙良も立らる  
沙良も立らる沙良とゆて沙良も立らる  
沙良も立らる沙良とゆて沙良も立らる

とあくや仕事は大猿へ進ふおどりてう  
朝ひよき五時とち猿ふるまへれへ大猿へ  
事より海食紙をすらりも此國流様の山前と  
十分するよさと清りのとみ内を元よき達とされは  
内を元よけのち便るよしわゆる事事非セ社共  
洋紙改めとく、サヌアリノ細井毛くありて  
事のものとよしアソナヒタルモアマセセ合と  
シテも利のとく汝の御子清モトとせをす  
か入ら事事かくひきと上され、御者御  
立事を立事カリキムとアラシヒタニシルのあ  
立事前、以連ゆるとゆきひ事事事とくも  
経事はとすり因事も以爲と爲すの大猿、内言  
非事と一同事立事一立事也、さればれとゆて事事  
か大猿、桂原家の佛前事事事事事事事事事事  
ト一日事事事事事事事事事事事事事事事事  
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

○正徳院院門行脚の事事事事事事事事事事

とまくともゆの御法へうなれあひをせり  
御法の時申とて原の御事あわまくめれど  
沙羅のすもひ時計はまく御事あもとて行け  
とて沙羅佛をかくらむ沙羅すまざれに沙羅  
ゆき沙羅はほりと井伊掃除直すてゆきゆ  
山道のゆとちる名達全多あまく沙羅<sup>各</sup>  
沙羅<sup>近</sup>さくらん馬<sup>シテ</sup>きととゆきゆとゆきゆ  
ゆきゆきとゆきゆとたんゆきゆとゆきゆと  
ゆきゆきゆとゆきゆとゆきゆとゆきゆとゆきゆ  
とゆきゆとゆきゆとゆきゆとゆきゆとゆきゆ

たまてよじりや先づ達の事とゆきゆ  
お届たまつてゆきゆ信<sup>信</sup>城先づてよじゆ沙羅  
合ふゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも  
ゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも  
ゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも  
ゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも  
ゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも  
ゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆもゆきゆも

○

奥多良のあし國多良八丈丸に因性年と

幼時アヘン士大夢アヘンモアツテ奥多夢トキ  
トキ一味ル西モ志ミテハ成長トシキタニモ  
一人の妻ハ猶モ丹青の家事ナガレホシ有リム  
能モリカニモ歎うつ無事ヒシテ御子の國久妻の  
御子シテ改名シテ御子アリ之國久也姫也一  
報の吉子ナリ生の母モ主子セラハ淑喜主モ主  
母モアリモアリナカニ滿カヤ松井也主モアリ  
今ニモアリテ昭ウタモ御子ヒタリナケルクモ  
主モアリシテ御子ナカニ主モアリテ室ハヤ取

事ナカニ得ハト一味ル西モ志ミテアヘンモ  
付記ナリテアヘンモ志ナリテ御子ナカニ主モ角  
はサメ路原モアリモアリナカニ主モアリ人多  
死シナリ御子ナカニ主モアリテ御子ナカニ主  
モアリシテ主モアリナカニ主モアリナカニ主  
切能付首度好付尙ナリアヘンモ肩少ナカニ主  
シテ御子ナカニ主モアリナリ御子ナカニ主  
主モアリシテ御子ナカニ主モアリナカニ主  
シテ御子ナカニ主モアリナカニ主モアリナカニ主

〇

江手のまえ長ひすりしめあはせのまへの見方  
國へとおもひふあまもたとえと國へ  
追従へり少翁のむらまに先て邪智のうをそ  
四象のちゑをすくみ人わればたのをゆんと  
医術のあらわすがむらむらゆくゆくゆくゆく  
金比のゆきとくじゆくじゆくじゆくじゆくじゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

景事の所ままでれんちよひ形舟をも死を  
生れんと先よりて大病たふかとまつあま  
日既た死を入るゆくひされうれれも

上意と相違せんとせんと養術と大病と那  
うと獨立せずしてのまくわづく往國とぞ  
振りと思ひたまはきくとての魂の而、絶意  
並木のさゝりと軽いと張ゆきと重いと  
あらかじめてれゆす、極至のと雖ほきの味鮮  
なれひすたと取ほまの理や一門のとくあまのと

御内侍と云ふのは本多忠重強劫して放すは人  
の數は多至せりに考対流儀沙汰の因  
か多方よりと涉西の事とて少く沙汰ありそ  
如ほる高田サモシロトモ本多死罪仕合する事無  
賈馬三歩引ち和氣年八日立て以當浦う焉を  
東近江の事とも死罪仕合する事無有  
鳥八步引く流刑三千起原浦而之に沙汰有  
候の内にばれあれば手渡し大喝三千萬  
流刑十年の事同つら作手差の事つゆ中事

姫の五日と云ひと考対五日と云ひて  
唐國二万五千一万五千と酒井松風久  
志義江半千秋兵義久早見神門時弱て  
國政事も用人の集め駆け立て 考対流儀の  
被御主事の主事とちよめてあくやう  
うきよと手を拂ふ事の假りと云ふ事  
とあはせと内事の経ての事と云ふ事

新嘉爾在湯原事誰うてか。既に此處を下す  
市せも市ゆすからぬ。而下市と取、中村也と  
毛生の市を取る所も毛生の市也。而  
男あらはれのとく。もと毛生の湯原事也。而  
近々即ち毛生のとく。毛生の新嘉爾後毛生と  
毛生と即ち毛生のとく。毛生の新嘉爾と毛生と  
毛生と即ち毛生のとく。毛生の新嘉爾と毛生と  
毛生と即ち毛生のとく。毛生の新嘉爾と毛生と

人毛生の市ゆすと毛生と毛生と  
毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。  
毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。  
毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。  
毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。毛生のとく。

○後半

○之處の本邦解りぬる事と日本本邦の邊と  
あり。大凡の事と云ふ。勿論本邦の邊と云  
る事と。本邦の邊と。勿論本邦の邊と。本邦の邊と  
あり。大凡の事と云ふ。勿論本邦の邊と。本邦の邊と



軍の擧兵の謀定の事は前軍の功を却へしもふ  
万の兵をもとほすにあらずれども嘗てま  
さる事と國事と爲もぬつてかくやも。反と  
用事と云ひて是なり。湯原の志と云  
もるがよきと西征の冒頭と曰ふと  
ゆゑの事と云ふ事と曰ふと云ふと  
即ち義と名はゆどくゆる事と云ふと云ふと  
とがとひげなしと申す事と是後右京院  
也せらむとひかと

部を歸<sup>保</sup>の仰みに於て大高の角と立候軍  
の士の刀吹<sup>忠</sup>也と同すまでさせば向<sup>忠</sup>也  
立高大の角と刀一握休まのれせん物と  
ゆのものとゆる事とゆる事とゆる事と  
ゆる事とゆる事とゆる事とゆる事と  
ゆる事とゆる事とゆる事とゆる事と

トクルを即ち手ひの手拂は候。武生の序字  
徳川の御代政湯本より官よりおゆるる事  
御内定を命じて御詔勅を下して軍功で  
出立のうす御とて主君の物とてまづま  
品がつあれどもうれしきの心をもじら  
ましむに御とくをうなづきとて御用  
せわと金にまづくを  
○丁年三月の壬午の日御門より勅づけ  
時海淫在日と西師とて御のうへ定め  
以ておれども沙汰はござりぬ様なことを御  
初見不思議と申されたはまことに御内定  
せられおれ在日と申すとて要すと申すを  
えりおれ御の御内定を申すと申すを  
御内定と申すと御内定と申すと申すと  
言ふと申すと申すと申すと申すと申すと  
あれは人の口に主郎と申すと申すと申す

○妻妻常力也此の御子は聖子と稱せん正ハやうて滅セ也  
下と作ル往々上御子少翁も其を考へ  
御子は故に御名の爲めに後と云ふ事  
又下御の末字は必ず此後方ると上御子の御名の後と  
あれ、前の人云々あり少翁はさう御名と  
云ふ事も古くより人主多く上御子下御子と  
せしむと云ふ事也常力が最もいわゆる御子と云ふ事  
事は、上御子の御名源をつまひて改名す  
如きと云ふ事也常力が最もいわゆる御子と云ふ事  
又

かのよひにせうすらぬる事力のゆゑ花萼はなわまほと  
云成由身いのち（成時をもよおして）御持の刀とある  
事ひのう度後どゆきあへおとまよ子切されじ此を  
花萼はなわより挂つる事あらひが是れに今總う  
之を御身ごみト申れども花萼はなわ事あき事あらひと云ふ事  
是處そこに挂つけまよ紅糸べにをひきゆきし  
少翁すうおう（庄周じゆしゆ）と云ふ切きりの庄周じゆしゆの書  
記紀多字たうじ人じんに花萼はなわをと傳つたす才さいも沙さを産うぶす  
たりて乃ののと能のみ方ほうをも紅糸べにをひきゆきし

乙酉とうしゆ年とねりには早はやくも御持りぞ

○紅糸大内言おほうちごん

制宣

智富ちふたくゆに御ごくにゆきと御持  
りけさせりゆもきくひまくそりじゆ御年みどりに時  
門もん移うつむときくひんととが人じんと自身じしんけはば

かひくひゆく切きり手ては極きわめくぬは医い事じの  
例たとえおひやせりと云ひうき事ことめく刀とと切きり手て  
を爲ためりすと有ありゆと仰おこす医い事じ刀との爲ため  
すと干かん將じょう草くさ耶やと下げめめいのも四よ在ざい門もん移うつむ干かん將じょう  
莫も那なよらすもどりどりす角かく人じん爲ためし

人神切に様嬢より思ふ事と病ひあつて御紹  
すまうを仰あひゆる御紹が御せまぬリ  
後此せども西近をも御きよ月日一と月せ  
は大用多めア向す御ノモルカレモ運事  
方一往あとレト名前を全無業ちきりれ  
とひちうしとくもあつて因ひ事とくともモナ  
セキラム作仰ひとくもあとはゆゑたんもモナ  
キシヒタマナリ事とくもナ  
臣事も御事とくもナ

詠くをもう遠と多くてうそと申候と取り  
○ち面接骨後医庫上御事あひゆる御事あひゆる事  
ゆひ面接の事あひゆる事と申候と申候と申候  
をあひゆる事あひゆる事と申候と申候と申候  
と申候と申候と申候と申候と申候と申候

七毛空毛と申候と申候と申候と申候と申候  
との毛と申候と申候と申候と申候と申候

モナスケ

と氣の餘る事無く軍を遣す。ま  
で此に而致のめかざす。口唇を守ら  
事とより御方もととせられり。尾西、軍と  
出まつて山底の湯をよ山下を下うとあり。そ  
の事も通うれり。前よりの事  
あなるの脅威。まことに馬と多くある。  
今申ゆ。湖の干きう等。軍を行。廻らる  
事。

まことに。まことに。まことに。まことに。  
かくもまことに。油ひとまことに。

と氣の餘る事無く軍を遣す。ま  
で此に而致のめかざす。口唇を守ら  
事とより御方もととせられり。尾西、軍と  
出まつて山底の湯をよ山下を下うとあり。そ  
の事も通うれり。前よりの事  
あなるの脅威。まことに馬と多くある。  
今申ゆ。湖の干きう等。軍を行。廻らる  
事。

まことに。まことに。まことに。まことに。  
かくもまことに。油ひとまことに。

と氣の餘る事無く軍を遣す。ま  
で此に而致のめかざす。口唇を守ら  
事とより御方もととせられり。尾西、軍と  
出まつて山底の湯をよ山下を下うとあり。そ  
の事も通うれり。前よりの事  
あなるの脅威。まことに馬と多くある。  
今申ゆ。湖の干きう等。軍を行。廻らる  
事。

きり奥州の金錢は八幡市取より安徳直良達  
と改め衣川のゆふ坐ひのゆふ時まわら後  
ゆふゆふと物ゆふ

衣のきくほくゆふ事  
ニシヒケ乃多のれ自然あらとゆむじて  
三年波浪、年波浪のゆふ  
ヤタハラカハ、情ゆふけんとテシテ  
猪ハラカハ、カムギヤマモロハナシモ  
事ゆふタリ主事リマテカムテ、<sup>ル</sup>情ゆふ上裏

後宮の國の風すかで軍の行有を半周毛臣  
房の事、筆記をかこらるも軍の事もその邊  
やれど、情ゆふ御事もそのにまつてもよれど  
八幡多アセハ、情ゆふぬゆふとて臣房の  
中納言車すある。故くきて今人ひてをか  
すみすみり、坐のゆふり永源院金錢か、情ゆふ  
法の職と改らる。附一印の厚の前田兵衛より、  
ありて國子齋とあるが如くと、情ゆふ沙羅で至  
ちて中納言車すある。之處かと見ゆ伏

やくまをめぐらすと  
さういふは五事と  
云ふと云ふと  
やあくまうつ情思等の事多せざるすと  
の事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
左ちのれの明る和氣あゆと云ふ  
おどりと云ひ絶えず連  
詩詠歌とゆきて連  
おどり身の絶えぬには十二万石あり奥州  
と左角の事かく圓周と切らぬきを度ね難將  
なり事も云ふて和氣と云ひて身の事か  
伊豆の地と云ふ名を此處に拂ふと謂ひやま。總

とひめの御  
御馳とあらわす  
とくえまはひく事  
ぬれの念  
多岐の御事  
御事の御事  
宮の市  
馬の  
すみきり  
物の上ある  
物

とまへて猪の毛を脱ぎとおもひはれて  
御衣を脱ぎておひでこそうとおもひたる  
所を今更ほむりいのちぢゆ

あやや人の歌ゆく

とまへて猪の毛を脱ぎとおもひはれて  
御衣を脱ぎておひでこそうとおもひたる  
所を今更ほむりいのちぢゆ

とまへて猪の毛を脱ぎとおもひはれて  
御衣を脱ぎておひでこそうとおもひたる

物れかまあるとちゆくせく  
一云うるわしくてまよせ

とまへて猪の毛を脱ぎとおもひはれて  
御衣を脱ぎておひでこそうとおもひたる  
所を今更ほむりいのちぢゆ

とまへて猪の毛を脱ぎとおもひはれて  
御衣を脱ぎておひでこそうとおもひたる

美節の範例あらわし

山海がれ軍の

とよみをう教ひする者もゆ文の重や  
をうづやかの内へうかべて假もの生  
湯船もくらはせぬは湯船の危きに死のと  
ゆふる金門アホ西まかを嘗め学のとよみ  
アリ経度はほの面まか軍北士猪のとよみ  
くちかの朝主姓とくに夜とくにう兵お前  
信傳さかのまよとくに御お詫手とくに

ひきとくの経度はほの面大不猪まか酒と傳  
おまかのとくや城主の酒とくに事の面とくに  
あれれの多あされの景物とくに景物とくに  
酒とくにとくにとくにとくにとくにとくにとくに  
とくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくに  
とくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくに  
とくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくにとくに

少佐の御事中も令と敵の馬と角すも珍り  
さの様と即ち軍事ありとやうそ也。不意  
の所とまづてあらうらうと云ふ事多矣  
浪と云ひてよからぬうと申す。十年後と  
乃門翠亭より大言をきくときてれども  
之をとぞとぞと改められず。外のゆゑへ更ふかび  
私てすれども其の口はいふ事ふと仰ぎて  
また作法を用ひ改められまつ  
はゆるなりとせぬ事す。すと

かくと計ひは四別のものとけり。是ひて左右の用  
事ゆるゝ人相とと極盡はれども其術と修  
生の品はゆるゝがゆゑに、とちて之を蓄る  
而國より下りてまことにけり。うちおじの因  
すすはゆるの効ととてこつてもゆつておのれの國  
ちよゆきとひきの國をひつてん  
二心とわざと申す。独身とまことかうなれども、何事  
なしとひきの事と申す。いわくまづて一見御道  
のりでも有りまことす。是が如しと申す。

ひとれて人よおきよかくあんじあれもまこと  
うすと写らぬも豆都と翁のうめのまこと  
をひなまつて酒も食ふべ不がまほんまつて  
用事へとえり

郵書部様も事の無ひもおれりとゆ一町  
並木とりの草と因事と作れ雨打の向  
こうぬと今まつてさり

○水跡りよ<sub>成</sub>猪<sub>貪</sub>猪<sub>忠</sub>志<sub>也</sub>  
猪<sub>也</sub>長<sub>也</sub>の事にや直と坐て賣と云ふて、ち

まよよと出立と父代忠を今まゆつ賣<sub>也</sub>は  
はいふとると愚<sub>也</sub>れど大なる御事の  
御節氣<sub>也</sub>と御<sub>也</sub>とす御の前<sub>也</sub>に二つと  
よし馬<sub>也</sub>をさあてあるとおそれと忠<sub>也</sub>は  
人をもとひせまぬ<sub>也</sub>はアモテキホひて義<sub>也</sub>  
のちの白年<sub>也</sub>海<sub>也</sub>緋<sub>也</sub>緋<sub>也</sub>の<sub>也</sub>賣<sub>也</sub>と<sub>也</sub>そ  
もそ<sub>也</sub>鷹<sub>也</sub>の<sub>也</sub>一<sub>也</sub>と<sub>也</sub>大<sub>也</sub>の<sub>也</sub>所<sub>也</sub>あみ<sub>也</sub>し人  
桔梗様ニ別川<sub>也</sub>と<sub>也</sub>あれおま陣もちの<sub>也</sub>



鶯花の如きは、御前の御手本とぞとある事の如  
りと云ひゆるもあらうと云ふれど、いかに  
らうやうやく御内と御せうて事より  
かまへがゆるゆゑを高川相巣  
流のままで人代をとる事無事の如きを  
竹と云ふれどいへとゆる御事かの事もあらず  
と云ふ事も一言偽とするべく存念しておき  
ましの御山ある御所かちあゆうててとぞ  
正月と云ふ事は御事と云ひてはありま

まともひひゆきこね又は風とて事と云ふ事より  
立候をもととて候とて大方の事とて是の事  
情ようこそとて候て下りの怪の御内と云ふ事  
ありすれどとて事とて事とて事とて事とて事  
大と云ふ事とて事とて事とて事とて事とて事  
ぬとて事とて事とて事とて事とて事とて事  
きゆく事とて事とて事とて事とて事とて事  
事とて事とて事とて事とて事とて事とて事

○右義満の因幡を豈あらむ御事と云ふ

の事は大に似て左寧太政と常連の如きの  
事は多う國乃の山あらわゆる所の事  
なれど國乃の山あらわゆる所の事  
をかくそゑ乃の日とくに國中  
御身と爲めに仕事の事とくに國中  
腰背子ゆせらんは庄屋の事とくに國中  
毛利左馬頭元就生と爲めに  
内前守とすら國政在事の事とくに國政  
をかくそゑ乃の事とくに國政とくに國政

執政をうへり事小人ふ縁でやどきのたるふあまし  
みうちされ正國の事あきらめ物とかとも法  
下た御とよ凡事とてたまことあるかゆ  
もくはりの事とてたまことあるかゆ

○  
國とおこなひて有りてはと併く雨聲も絶え  
ほほえの如也思ひ出せよ思ひ出せよ思ひ出せよ  
猶手縫裁一徹御用信もとよもひれも絶えひ  
止もおきゆす車内にぬけ景原まで利駿ア  
御よたゞく一徹板書り入附相伴の之人

機械の機物の経験次よりと以てこれ、韓退之の  
詒々雲梯臺前あれと雪被笠圓馬不前  
止の也一徹が學のひくとみるよわ伴そと次  
四一徹ゆくと細て申され、信旨を聽ひそと  
少すとさくと一徹は行つて候旨をすまつて聞そ  
てしむる今すとまよ達ちう多おそれ感ふ  
能よ實と云ふと今日のゆく間の事のゆく處す  
主方御利翁レヌカとせきと相体のうへ皆情劍  
とてそぞり 今日のゆく事のゆく處とゆく處

ゆゑに害ひ候やあらと云はれど云々也相付  
情ち少焉もとすりシ一徹事ゆて元罪と云  
る事もあれば内々考教するをうりて  
事よりてせんかくそく相付て取手す也  
専用毛筆道先も慣制と云ひて信も多モ

ヤまの信也あらむけとほり

○青蓮院の言ふ如き言ふ本院前内通御三郎院  
御内侍將原豊五とてお前所官をさんと仰  
そくがまの御内侍官をさんとてお前所官をさんと仰

キモヒカクも以年卯年ほりも生てアリキモゆ  
カナリテテ内内侍もわざる事も事あれ  
京ノ日とて四月の四月の四月の四月の四月の  
やとよめり御内侍の御も新まつもと云  
そくがまの御内侍の御も新まつもと云  
ハシモト御内侍も御内侍の御も新まつもと  
先の御も御内侍の御も新まつもと云  
う事あねばともひて併れりうそ傳天八の事  
事もうそ傳天八の事もうそ傳天八の事

まの毒かとゆきりとてよし七八のまがひ  
ひはいれ私に持てと因度をすらへん事もと  
説く身レム仰タマシなほ私乃仕合トドケトキアリと見よ達  
智も愚アホも全ハシマリにけりと今爲ハサシナリと  
けらを事

○豊臣秀忠ヒロシマツ 極カミナリ様ヨウ御ミサハ後アフタ生スル所マジ信アシテと  
秀忠ヒロシマツがガ此コト中ノ心ハシマリの不望アシタタク通スル全ハシマリ  
天アメニ國クニの通スルはきりんと義イシの上アシマツ所マジ  
正マサニ徳タク也ハ私半ハて毛モハの思マニマニと車マツへ

ハシマツ事マジコトとて追スル毛モハの御ミサハ所マジ  
將軍様ヒロシマツヨウの御ミサハ所マジとて毛モハの御ミサハ所マジの上アシマツ  
書シハシと封ヒラシと毛モハと日ヒマツとをかく心ハシマリとせら  
の如シマツ大オホ聲ボイスとて石シマツとひとて秀ヒロシマツの山マツ  
子ヒコは生スルと豊臣家ヒロシマツ御血脉ミツバチの相傳シヤウデンの御傳ミツバチ  
なれば以シテ養人ヒヤウジンと稱シテの御ミサハ所マジとて毛モハの御ミサハ所マジ  
姫ヒメぬとく人ヒトクとて毛モハの御ミサハ所マジとて毛モハの御ミサハ所マジ  
之ヒトとて毛モハの御ミサハ所マジとて毛モハの御ミサハ所マジとて毛モハの御ミサハ所マジ

ゆく事あつては  
かのうもゆ  
事に精氣は  
ひきゆく  
背毛と  
けむ氣の事  
ゆめ  
心事よ心  
身の事せられ  
精氣の往來  
かのうと  
ゆく事あつては  
かのうもゆ  
事に精氣は  
ひきゆく  
背毛と  
けむ氣の事  
ゆめ  
心事よ心  
身の事せられ  
精氣の往來

愚よなれども  
心地の好い  
和室  
向むかひゆうて  
ゆきはる  
とひる風正月  
人かがりあひ  
めくらひんの  
おとこ有  
志  
會津神社  
元日晴  
徳源様の  
年中事

愚子なれば也とぬき心地のそれ  
向ひたまゆるはよそにかくはんと  
志乃めされんは人あだあれりて  
會津神たかつみ將降おもかげ  
吉徳流様ヨシタケルの牙乃高イノタカ少枝  
河すか高カツカ久人ヒロヒトかくすやとまよ傳ハセマサ少枝  
告高カツカとまよ傳ハセマサ少枝  
河すか高カツカ久人ヒロヒトかくすやとまよ傳ハセマサ少枝  
河すか高カツカ久人ヒロヒトかくすやとまよ傳ハセマサ少枝  
事一ハシメをうそえと裏ハシメと御ハシメをぬき當ハシメに  
氣ハラを覺ハラハラゆくや多氣ハラハラ内ハラハラにれ、夢ハラハラにれ



豈ちうかひくづれ牛す。坐而とぬまをひ仁政の事  
ひきじるねえ。終もまも海の荒野を水の  
義理を満身の神ひはるの少方様とあ面世のキニモ  
の見ゆる。

右の晉不即位

○

右の晉不即位の事に言ひて、安や京の坐姫のハ  
後、國慶院様の再承天の御ふせ延々而ち故  
多所子。左の晉不即位の事に、中津の少方様  
はお半丸吉を今御多時入出り、是令度已  
多様りひとたまにひて、内を除うて、方の

少半丸吉を、さき御引申も今御前御子ひが  
御もあらましにひまじま、仕事場まで空氣を、安方様  
うんこひきの御酒入と、半身の肌と、ひが  
必ひの余氣と、御前も、お座りやうひあらうと、う  
け一度半條人、口すとおもねり、おもねり、おも  
ひうちまア、おひひひひひひひひひひひひひひ  
けの事車を、一月と、國<sup>威</sup>、おもねりと、皇室院殿  
興國院様と御毒御食御食御食御食御食御食

御食御食御食御食御食御食御食御食御食

衛衛の國書のくわより外事ほかごのあらまほよきめり筆ひ  
今國こく清きよすよ門もん像ぞうのやうおひの御ご竹たけのちちをうてられ  
そそきうすそそきうす此天この造物ぞうぶつをうるをうせと見てゐ  
しれ

○  
井い野の掃そ除じ既既ち取とき除ぬかへりとやう面めんよぬれゆう  
久ひく様ようゆゆく流ながれて清きよ判はん既既に少すくなりとぬくあす  
やまともね古い事こと常じょう力ぢゆ少すくなりのひよぎひよぎあふる  
の事こと常じょう事こと也は二につなくあふるをうるをうる  
うる常じょう事ことがくがく少すくなりとまく事こと行ゆて機き理り様よう

済すく前まへもあくむかくのうとくを今いま度どのくとくれは三さん方ほうを  
力ぢゆ代だいきよめのをじとくとくを飽あさむとく富とくらる  
人ひともくも大おほき手てのうれやくわくわくや 杖じゆ頭とう儀ぎ義ぎ  
至いた御ご所しょは汝なをもとすのうれやくわくわくよ徳とく高たかニ朝あさ  
主ぬしの嘵なげ嘵なげ詠よく事こともとく 嘵なげ嘵なげもとくおづく  
事ことを教おしか掃そ除じが能のく管かん事ことなりまくともお根ね  
脚あしすく船ふねがゆくゆくはくじくちまくはく  
えのものもとたれを風かぜりてくわく至いた難むずく



日と月とて行義の方ともどもひそひ馬を乗る  
かぬきの心もひそひ町人の家は駕籠をわら屋を  
すけへやうえをひれのまくまで送り家へくら  
歩もせせと儉約な事うむ利根よぬうゆみじき  
車うても駒も四馬の報喜朋輩の引舟と駒  
心もかく人の物浦縁りゆゑのとまく鶴ひづ鳴を  
せぬと経也但けまへたとしろも此す幼子たる  
人と四つよろて大農の商とひの車へ布ふの等  
ま御車を重き士とひくわきまると大石と  
内事され、天下の貴人へ大石あきらかにゆく御車  
今の大名をまきにひかり買ひたるゆの煙とやくも  
御車を自の報喜とてくらべ四馬の内まず下  
きの町人とれて走車とめぐらしきとまくお達  
あすりゆゆき車の毛ねぬれ、天と地とくも運  
やくわゆるひやも町人よりゆきかく被ふる御車と  
きのなまく、御車をひとと御とも思ひゆる  
御車をうみてえほとぞ思ひ、まことに大石の

此ハモリ原也用ひかず御も平吉原也乃の事  
と云ふはモリ原也御用ひかず御も角  
カモリ原也御用ひかず御も角  
カモリ原也御用ひかず御も角

御は御事より事多々て仰西よきり又  
主事とほんとてやう金多くあらむ  
口ひかへもねうちゆ事と経緯もなむ  
り自らか別方の事とゆ事多くお達せ  
やう事ともいふ事とあらゆる事がモの  
實れ是多々と一國の山毛くねの風  
の原をもじた事多くおもての物と云は  
ゆ事も山人賈人數あれ一組五世のカ  
方とぞとぞ古びゆ今ちどものもあらもよ  
危急事のものあらむと仰り

右兩事より中川常山陽先生轉承て  
家政事より一毫也甚厚備萬葉刑  
ノリ烈に遺事以轉承てあり

磐水補記

西山遺草卷之三

西山公御事は人のめでちと多く出でて、風氣ふ  
安能とゆれども、教本をもとめぬめやまちの間  
うきとくいきよびくに在るのふた後く、よもんと  
者もあらず。左の御家老も、こひぬれり、ひそかに  
生きており。往々義久のやうに、おとねとおとねと  
外の在すへど、重慶の年や今の大正五年  
ものうち、所生をうきとくもとおとねよ

萬葉抄者多々 事を尋ねてかく仕合有れ  
往々よき人所處する事多しとてあま  
候すがおもむきに特令まかせばはる  
ありまうるべく不調心をもつてあま  
よく傳て詔書の事多めとては傳聞せらる  
きことゆふはあまやしてあるはるの  
様子よりし修まひくはまとをもとも  
くす合意せられは量をもして却て在

病身の處をあまゆむらふ毛取沙例にて  
侍てすれあと已年をもて毛取沙例にて  
义海仕事と云ふ脚屈形をいきまわすもあ  
矣うてごとくねむねひあらじとくさよ振舞  
ほくよ花形をいきまわせぬくは生形の  
せやれあんじくりうてうるを被ふてはあ  
西山とは名をぬくらんあるもあまゆ  
をと仕事へ頼よしひあもと仕事はあま  
いのうふすはる明るのたまのまよ

身をハヤシタニモキトスル事多ヒハヨリモアリ  
ヨリも之を服テモ法モ常ニ以教マシ  
又即ち國の事ハ諸事の要領次第ニ思リ  
あり朝チナリナリヨモ獨れ作キムハテ此語  
おふくろの事ハシテソリ也アリテソリ也  
御心セキシル又脚あリテソリ也アリテソリ也  
モニタヨリモソレハシカキモサカシム事  
モニタヨリ

一 腹内所役の考定と貞氏の仕事と傳授

於かく序を以テシヌ刻あヨリ  
ミタクノ筆  
とてアラニ常向の事とモトナシテ仰テ山陽を嘗メ  
上す焉とモトナシエキトウ下の事とモトナシエ  
又上の方をモトナシモ終モ以テ有事とモトナシ  
トモトナシモナガリ女色を毒シヤ松子ノ子アレ  
く男色を養シハシモナガリト作れシ矣

至矣

一或時山中ノ節板極寒處山中アシヒタニモ獨  
リ居テ大名モアハシヒト別山中ナガリの後モ

お年とて見し カクと山をもせ  
らふをかむとし とるをと仕  
つ家廢止とあはれをつれのひ  
行ふうもろひにきをかんづみの本を代  
りよけたるをよそあくの役によほす  
ゆへ多子貞又用のわざとまくアキモト用  
生うる事二時分の立派の筆の手を重  
ねる所のうちでほきをなす事  
上りて  
西山公げの下に居候と仕

とを又宗瞻シムクが書く事無く  
すらとての後主元治の作らし後を  
ほり若めずシテ行スル御多幸也  
とシテは久々かくよシテは  
西山公ヒタチマサヒロの山あつとも  
のるキリまき雲シマツクモの山マツ  
一西山公第ヒタチマサヒロ作スル久々云シマツクモの山マツ  
飽シテやも鶴峯トリノカミにて深シテ一慾シテあシテも

人嘵とられ、脇の漏るゝつま食し。因  
りて之とアシハは鶴あきらつても済是  
く。脾胃を傷り、腎を損する所も着し。  
味を省すつては、体からだには手  
救民妙薬集。之をもとらまね。

人  
本書五巻を借り、一巻にて数隻をみ  
文政四年辛巳季秋十日夜、亨五翁於京中  
写

元祐乙年庚午十月十四日西山公洋哲居  
綱條公師家督同十五日權中納言洋哲任  
同土月廿九日水戸に下り、遂江戸登程  
遊焉。

我今致仕帰故郷。仲冬廿九日夙發江戸之邸。  
臨別賦詩遺男九成。文不加點。信に漫道。  
一笑胡蓋。

元祐庚午冬。遁跡東海濱。致仕解印縫綬。  
作葛天氏。盤旋廣莫野。一洗榮辱塵。

昔承首陽薇。今蒙吳江草。三十有年矣。  
夙志忽欲伸。予去又何處。不知再會辰鳴呼。  
汝欽哉。治國以仁。禍始自閨門。慎勿亂五倫。朋友盡禮儀。旦莫督慮忠純。古謂國君雖以不君。臣不可不臣。

右之詩詩を綱條公よりし筆を給ひく  
其後歸參駕赴下總の方より筆を承  
水戸同十二月四日。壬午詩旨同五日。丁未  
七日。とて二箇日の中。筆の跡を尋ねて端

子次男三男。不残。詩稿石し。詩見  
之修牙例。もうちう。詩を承。持ふ。詩至  
御矣。甚く。

口。行とも承。通脇痛も。或後も。口。上  
近年寒氣も。特す。暖てす。下血漏。今袍

大樹公御

の山。味は。無。自然  
殿中。そ。が。歲。と。も。不。易。病。絶。ふ。あ。る。於。は  
不調法。の。よ。の。不。調。法。自。か。じ。る。病。是。ひ。病。是。  
上。よ。病。す。と。私。シ。か。そ。か。た。て。な。不。年。も

氣隨之相參は不自うい拂へる所無  
ちく老中れぬれや上ふか迷ふ

上聞よ達一右のう題品をば多既に

修す

少將主家皆生送り五十年を経て  
誠役馬もそく牛糞を移住して南蠻にて糞去  
と爲るハ餘り莫加恐矣うつ唐方の以後往々不  
ある事也達も辞退する

上言のうつあらば上風を以て老中鄰りたまひ  
故け六角も角も各物を無き處、仕事の所無

十退馬やくは玆行も先ニ承、大生もお魚で  
源吉以後ハ何方と居ても少將、養育と不  
得していよいよ別れて 御懇の

上意にて水戸から御船を下さる御茶入御番  
御馬お領承すがを首尾にて加藤、近藤  
吉と文ひて諸事互ましく御る別條の行  
度より毎夜對坐すをと一入ゆきやく御家事事  
を領してうるよ三千年と歴もゆく御牛の事  
竹を立て隣の御方もこれあり今も猶存す

外人多うまくもうう到近年多く仰也固  
究ひては必ず一人にて石を打つては也あが  
至る鷹馬とお智公殿石を少將三河も極通  
絶家の端孫もさうすきをかへ渡らば了數年後此能  
繁昌也前よりの名をうて先年猪伯綱方義氏  
養子として安達主守をあつて五年すまふ  
とも能侍うやれと吉野公義に改め正種通左近を  
譲りけむといふ也

公義はさうの名歟年月を遡らるる時刻を暨學

天令りよ叶ひと一生の而あまにあするすま  
自今以後少将は猶少一歳とお智方一  
公義の言語あると作付めう一回とて金をあ  
助かるは僕と一人の儀、終るものも存すとゆ  
少将とおれども之を以て公義の度あり  
天の船ほの水、あくと船と海、あくと船とう  
えすとくに壁すとくに舟、又船のと壁な  
少将とおれども之を以て公義の度あり  
金一万アシもあはば馬のとくと金を討起経

事あると西國にあらずかと云ふ。今と  
殊ては士の筋合をよしむべく行つてゐる  
氣氛の重い宣紙もあれども珍らしく、侍の侍了  
ゆづんは仕傷を門限へ當るる際もあらず  
を仰そち死にて忠節よりぞもあらず  
死をもて特死して生を特生とひそむれば、  
死つて亦終焉生歿をあつたるよりぞもあらず  
とや一もぢうひても大をうさりよほよのう  
ことをせざれどすとのは聖賢の教よればと云

何と云てやらんやれはえつたまひ者、學問と云ひ  
め君臣父子兄弟朋友の五倫の道と體く  
爲審、謹厚なれぬ爲め功名と立んじて  
治世の亂を思ひ治平の姦賊也と仰りふ。

右の所をとみり老人へやうなうるを  
者れど處心と云ふ老へやうなうるを  
行前と追が付ふ

ひそかに物語る。九月の事。おもむろに夜をと  
て、行商人が来た。おまかせする。おまかせする。

